The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	院政期以前の複合名詞アクセント : 5拍のものについて
Author(s)	陳, 曦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 41-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72796
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

院政期以前の複合名詞アクセント

—5 拍のものについて—

陳 曦

要旨　本稿では，院政期以前の複合名詞（5 拍）のアクセントについて，桜井(1958)の記述をアクセントの融合・非融合の観点から整理し，現代の近畿・東京の情況と比較している。その結果，『非融合アクセント』の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かったという可能性が示唆された。さらに，その可能性を確認するために，『日本語アクセント史総合資料-研究編』などにおける 3/2 と 2/3 の複合名詞のアクセントを調べた結果，「非融合アクセント」（無核を含む）の適用範囲は現在の東京と近畿アクセントより広かったという可能性を明らかにできた。また，院政期の複合名詞については，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）であるかどうかという語構造の違いが，後部要素が 2 拍のもののアクセント型を左右する要因の 1 つとなっている。

1　はじめに

日本語の複合名詞には，[チュ˩ーゴクミ˥ヤゲ][1]（中国土産）[ジ˩コボ˥ーエー]（自己防衛）のようにアクセントが中高型の 1 単位に融合する（以下，**融合アクセント**）ものと，[˩チュ˥ーゴク˩ナ˥ンブ]（中国南部）[˩オ˥ーザボ˩ーエー]（王座防衛）のようにアクセントとして融合しない（以下，**非融合アクセント**）ものがある。

現代の近畿アクセント[2]における複合名詞のアクセントについては，和田(1942)の「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」という論考で詳しく紹介されている。現代の東京式複合名詞アクセントとの大きな違いとして，（本稿でいう「融合アクセント」の場合）現代の近畿アクセントには前部要素の式が複合語全体に継承されるという「式保存」の法則があることが知られている（和田 1942）。ただし，「『式』の有無の違いは大きいし，音調型も『単純語』ではかなり異なる。しかし，それが『複合名詞の後部要素』になると，両方言の核の有無と位置がかくも一致する」（上野 1997）と述べられている。

一方，古い時代の複合名詞アクセントについては，桜井(1958)が，平安時代から院政時代にかけての 5 種類の文献の 5 拍語をアクセント資料として，平安・院政時代の京都方言における複合名詞のアクセントを観察している。

---

1) 角括弧内の表音カナに付けられている記号“˩”は上昇，“˥”は下降をあらわす。
2) 中井幸比古の言う「京阪系アクセント（中央式）」のことである。

本稿では，5 拍の複合名詞（前部 3 拍+後部 2 拍のものと，前部 2 拍+後部 3 拍のもの）について，まず桜井(1958)の記述を融合・非融合の観点から整理し，現代の近畿・東京の情況と比較を試みた結果，『非融合アクセント』の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かったという可能性を示唆した。そのうえで，①非融合アクセントについては，歴史的アクセントのほうが適用範囲が広かったのか，②歴史的アクセントの場合，語構造の違いによって，アクセント型が異なるのか，を明らかにするために，『日本語アクセント史総合資料-研究編』（秋永ら 1998）と，『日本国語大辞典　第二版』（北原 2003）を調べた。

2　桜井(1958)への整理と考察

桜井(1958)では，まず前部要素と複合アクセント形態の関係について観察し，その結果，「前部成素の原アクセントが高発式ならば，複合アクセントも高発式，低発式ならば複合語のアクセントも低発式になる」という原則が明らかになった。この結論は，金田一春彦が『観智院本類聚名義抄』を資料とした研究の結論，そして現代京都方言に関する和田(1942)の結論と完全に一致しているという。このように，複合語における「式保存」の法則は古い時代からあったことが明らかになっている。

下がり目の位置に関しては，和田(1942)によれば，現代近畿の複合アクセントにおいては，前部要素が二・三・四・五音節で後部要素が三・四音節の場合，後部要素はもとのアクセントに拘らず●○○[3]，●○○○のように，後部要素の 1 拍目で下がるのが原則であるという。ただし，「後部成素に四音節以上の語（稀には三音節語も）が立つ時は往々変則的な複合を生」じ，「途中にアクセント契機を有する語であると，出来た複合語に於てやはりその契機が現れる」（和田 1942）。これは，後部要素が中高型の場合は後部のアクセントが残ることがあるという点を含め，現代の東京の複合名詞アクセントにおける後部要素が 3 拍以上のときと似ているが，松森・新田・木部・中井(2012)によれば，後部要素が 3・4 拍の中高型の場合，東京方言では後部要素のアクセントが保存されることが多いが，京都方言ではその場合でも後部要素の 1 拍目で下がる型が優勢であり，このような場合は東京方言より後部要素の 1 拍目で下がる型になることが多い，という。

院政・平安時代の後部成素が二・三音節名詞のアクセント形態を桜井(1958)が表 1 のように一覧でまとめている。そのうち，三音節後部成素（の五音節名詞に）ついての考察結果は次のⅠとⅡのとおりである（桜井 1958 より）。

3) ●は高い拍，○は低い拍をあらわす。

表１　二・三音節後部要素の複合アクセント形態一覧表（桜井(1958)より）

		後部成素形態		複合アクセント形態	先，後両成素の原アクセント	複合形態の分類
二音節後部成素	A	…●　○	イ	●●●～●○	●●●＋○○，●●●＋●●，●●●＋○●，●○○＋○○，	語的複合
			ロ	○○○～●○	○○○＋○○，○○○＋●●，○○●＋○○，○○●＋●●，	
			ハ	○○●～●○	○○●＋●○，○●●＋○○，	
			ニ	○●●～●○	○●●＋○●，○●●＋●○，	
	B	…●　●	ホ	●●●～●●	●●●＋●●，●●●＋●○，●●●＋○○，●●●＋○●，●○○＋●○，●○○＋●●，	移動辞的複合
	C	…○　○	ヘ	○○○～○○	○○○＋○○，○○●＋○○，○●●＋○○，	
			ト	●●●～○○	●●●＋●●，	固定辞的複合
	D	…○　●	チ	○○○～○●	○○○＋○●，	原アクセント保存
三音節後部成素	E	…●●○	リ	●●～●●○	●●＋●●●，●●＋●●○，●●＋○○○，●●＋○○●，●○＋○○○，●○＋○○●	語的複合
			ヌ	○○～●●○	○○＋●●●，○○＋●●○	
	F	…○●○	ル	○○～○●○	○○＋●●●，○○＋●●○，○○＋○○○，○●＋○○○，○●＋○○○	
	G	…●●●	ヲ	●●～●●●	●●＋●●●	原アクセント保存
	H	…○○●	ワ	○○～○○●	○○＋○○●	

Ⅰ　先部成素の原アクセントが，高発式のときは，e・(リ)・(ヌ)●●○型，低発式のときは(f)・(ル)○●○型となって，最後から二番目の音節に“核”を有する型になり，最も例が多い。これは当時の『基本アクセント』に実現した例である。

Ⅱ　(g)・(ヲ) ●●●型，(h)・(ワ) ○○●型になる例は少数で，統て，先後両成素の原アクセントをそのまま残したもので，複合アクセントの法則から除外される。」

表１とⅠの示すように，平安・院政期の京都方言における複合アクセント（五音節）では，後部要素が三音節の場合，後部要素は●●○型と，○●○型のように最後から二番目の音節に下がり目がくるものが非常に多く，このような形は和田氏の言われる「語的複合」をなしているという。前部要素と後部要素がともに元のアクセントを保持しているかの観点から，これは本研究の言う「融合アクセント」に相当すると考えられる。そして，最後から二番目の音節に下がり目がくることは言い換えれば，下がり目が後部要素の一拍目で下がるのではないことから，アクセントが融合する場合でも，下がり目は後部要素の１拍目では昔はなかったことが分かる。

また，表１とⅡの示すように，平安・院政期の京都方言においては，後部要素が三音節の場合，後部要素が上述の●●○型，○●○型になるもの以外には，●●●型（●●＋●●●→●●～●●●），○○●型（○○＋○○●→○○～○○●）になるものも数少なくあるが，桜井(1958)はこの２種は原アクセントを保存している理由で複合アクセントの法則から除外している。前部要素と後部要素が元のアクセントを保持しているという点においては，この２種は筆者の言う複合語の「非融合アクセント」発音におおよそあたると考えられる。なお，この２種の「非融合アクセント」にあたるタイプの語は，桜井(1958)の調べた範囲では全部で４語しかないことから，「非融合アク

セント」をとるものより，「融合アクセント」をとるもののほうが多かったことが窺える。

なお，高起式無核の●●～●●●（●●＋●●●→●●～●●●）と低起式無核の○○～○○●（○○＋○○●→○○～○○●）とも，前後の要素のいずれも無核で，しかも前後の要素の式（低起・高起）が同じであることに気づく。つまり，前後の要素は式が同様な無核のものであるときにしか，原アクセントが保持されないということになる。ただし，●●＋●●●については，●●～●●●になるものは少なく，●●～●●○になるものが多い。

秋永(1996)では「古代日本語は単純語・派生語が主流であったが，おいおい複合語が大半を占めるようになった。中でも複合度の高い癒合語・結合語がその大部分で，一まとまりのアクセント（以下アと略す）で発音されるものが安定型となっていた。複合語において一まとまりの安定型のアというと，前後部の結合部分，即ち前部成素の末拍か後部要素に核のある中高型，もしくは平板型である。」と述べている。

桜井(1958)は院政・平安時代の 5 拍語の「基本アクセント」は最後から二番目の音節に下がり目がくる型であると主張しているが，もし上述の秋永(1996)の考え方も考慮に入れ，そして，もし低起・高起の式の区別が加わった場合「平板型」を「無核式」と言い換えられるのならば，もしかして，前述の●●＋●●●→●●～●●●（高起式無核）と○○＋○○●→○○～○○●（低起式無核），のような前後要素は式が同様な無核という組み合せの場合，原アクセントを保持したままの形（●●～●●●と○○～○○●）はすでに全体がひとつの無核式をとり，複合語としては一まとまりの安定型であるため，当時の五音節語の「基本アクセント」（「第四音節--終わりから二番目の音節--に，アクセント“核”のある●●●●○（高発式）○○○○●○型」（桜井 1958））にならなかった可能性が考えられる。

数は少ないが，この●●＋●●●→●●～●●●と○○＋○○●→○○～○○●といった，前部と後部が元のアクセントを保持するもの（桜井 1958）を見てみる[4]（下の(g)・(ヲ)と(h)・(ワ)）。

(g)・(ヲ) ●●●型 (●●＋●●●→●●～●●●)　（この 2 例のみという）
　コマツナギ　「狼牙」
　左岐波良比　「先駆」
(h)・(ワ) ○○●型 (○○＋○○●→○○～○○●)　（この 2 例のみという）
　古之阿布**良**　「金漆」
　奈加古可**遅**　「多心」　（後部要素のアクセントが不明という）

4) 表記は桜井(1985)によるもので，低い拍は普通の明朝体，高い拍はゴシック体。

意味からすると，4語のうち少なくとも**コマツナギ**「狼牙」と古之阿布**良**「金漆」[5]は，現在でなら「山桜」のような「複合語アクセント規則」の適用の典型的な前後関係だと思われる。要するに，それらは，現在「非融合アクセント」をとることの多い，並列構造や後部要素が状態や動作をあらわす複合名詞，ではないということである。それにもかかわらず，**コマツナギ**と古之阿布**良**は前後とも原アクセントを保持し，「非融合アクセント」にあたる形式をとることから，平安・院政期の京都方言における複合名詞は，現在の東京方言（現代の近畿方言についても言えよう）より，前部と後部の元のアクセントを保持するという「非融合アクセント」をとるものの範囲が広い可能性が示唆された。

以上のように，桜井(1958)の記述によると（後部要素が3拍）2要素からなる複合名詞のアクセントについては，古い時代（平安・院政時代）には「融合アクセント」と「非融合アクセント」の2種類の形態があり，そして「非融合アクセント」をとるものより，「融合アクセント」をとるもののほうが多かった。

また，5拍語の場合，「融合アクセント」をとるとき，前部要素の式（低起・高起）が複合名詞の式を決定し，核の位置は常に最後から2拍目にあった。式保存の点においては現在の近畿アクセントと一致しているが，核の位置という点においては現在の近畿アクセント及び東京アクセントとは異なる。

このように，「非融合アクセント」の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かった可能性がある。

3　『日本語アクセント史総合資料』を用いて

そこで，上述の「『非融合アクセント』の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かった」という可能性を『日本語アクセント史総合資料-研究編』（秋永ら1998）を用いて確認することにする[6]。

---

5) 「コマツナギ」と「コシアブラ」と表記する語は現代にもある。『日本国語大辞典』によると，「こま-つなぎ【駒繋】」は現代の標準的なアクセントでは[コ「マツ┐ナギ]。「こし-あぶら【漉油・金漆樹】」は現代の標準的なアクセントでは[コ「シア┐ブラ]，現代京都アクセントでは[コシ「ア┐ブラ]。

6) 『日本語アクセント史総合資料-研究編』（秋永ら1998）の「第4章　複合名詞のアクセント」で扱っているアクセントについては，「複合語のとるアクセント型の傾向をとらえようとするとき，『式保存の法則』に『アクセントの体系変化』が被るために，院政期から現代までを一括して扱うことができない。そのため，ここでは体系変化前のデータを主たる対象とし，変化後のデータしかない語については割愛した。」という。
また，複合語の認定については，「連語か一語かの判断が問題となる」とし，「院政鎌倉期の資料では，構成要素それぞれのアクセントを残すなどして『アクセントの山』が二つに分かれた例が見られるが，アクセントを根拠にそれらをなお二語であるとはできない。通時的に複合語のアクセントを概観しようとするならば，連濁等との関連を押さえつつ，一語としてのアクセントが成立していく過程として過渡的段階も含めた全体を採り上げるべきであろう。動詞＋動詞の複合動詞については，近世においてもなお完全に一語化したアクセント型のものは少なく，二語の連続にとどまる段階と複合が完了した段階の間に，複合度の弱い（しかしながら二語とは扱えない）[接合動詞]段

なお，木部(1978)では，複合名詞の語構成とアクセント型の関係について，(1)名詞＋名詞，(2)形容語語幹＋名詞，(3)名詞＋居体言，(4)居体言＋名詞，(5) 居体言＋居体言，の 5 つに分類している。その中でも，(3)名詞＋居体言の語構成を持つ 4 拍名詞は，「複合語アクセントに非常に特色があ」り，「複合語アクセントが全平調傾向を示す」としている。一方，同じ(3)名詞＋居体言の語構成を持つ 5 拍名詞については，「事情は少し変わってくる」とし，「マイナス二拍め契機のものが多い」という。

そこで，『日本語アクセント史総合資料-研究編』を用いて，「前部 3 拍+後部 2 拍」(3/2)と，「前部 2 拍+後部 3 拍」(2/3)のそれぞれにおける，複合名詞の語構成が「名詞＋居体言」であるか否かによって，アクセントパターンの割合や優勢アクセントなどが異なるかを調べることにする。

このように，資料を調べることで，①非融合アクセントについては，歴史的アクセントのほうが適用される範囲が広かったのか（具体的には，歴史的アクセントは中高型ではなかったが，現在のアクセントは中高型になったものがどのくらいあるのか），②歴史的アクセントの場合，語構造の違いによって，アクセント型が異なるのか，を明らかにしたい。

3.1　手順

『日本語アクセント史総合資料-研究編』において 5 拍のもののうち，「前部 3 拍+後部 2 拍」(3/2)と，「前部 2 拍+後部 3 拍」(2/3)のもので，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）と，「動詞出自」「形容詞出自」（V・A 以外）の複合名詞のアクセント型を調べた。

後部要素の「語類」[7]の欄の中で，不確かなもの[8]や語類の変化のあるもの[9]は除外した。なお，同一語のうち，複数の歴史的アクセントが見出されると記載されている項目に関しては，現代のアクセントと比べる際の便宜を考慮して今回は対象外としている。

また，現代のアクセントと比較するため，上記の手順を経て得られた項目を『日本国語大辞典　第二版』で調べ，当該項目において（現代の）「標準アクセント」と「現代京都アクセント」の記載がある場合はそれらを記した。

3.2　結果と考察

3.2.1　『日本語アクセント史総合資料-研究編』の結果

階を設定する必要があるのである（上野和昭「平曲譜本にみえる動詞の接合アクセントについて」『徳島大学国語国文学』3　1990）」と述べている。

7) 「語類」というのは「早稲田語類」のことである。

8) 『日本語アクセント史総合資料-研究編』において，『語類未詳』という意味で『語類』を空欄にしたものと，「○類か・○類相当（#)」と記載されているもの。

9) 「語類が移動した（統合された）もの」。

「前部 3 拍+後部 2 拍」の複合名詞と「前部 2 拍+後部 3 拍」の複合名詞のぞれぞれについて，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）と，「動詞出自」「形容詞出自」（V・A 以外）のアクセント型を表 2 と表 3 に示す。H・L・F はそれぞれ高拍・低拍・下降拍をあらわす。

前部 3 拍+後部 2 拍の複合名詞について表 2 を見ると，後部が「V・A」のもので最も優勢なアクセントは無核（LLLLL を含む）であり，後部が「V・A 以外」のもので，最も優勢なアクセトは-2 型であるが，無核も少なくないことが分かる。

表 3 から，前部 2 拍+後部 3 拍の複合名詞については，後部が「V・A」のものも，後部が「V・A 以外」のものも最も優勢なアクセントは-2 型であることが読み取れる。

表 2　『日本語アクセント史総合資料-研究編』における 3/2 拍のアクセント

	3/2 （V・A）		3/2 （V・A 以外）		3+2 全般	
合計	24[10]		129		153	
無核[11]	10	42%	34	26%	44	29%
無核（LLLLL を含む）	19	79%	47	36%	66	43%
-2 安定型[12]	3	13%	54	42%	57	37%
明らかに非融合[13]	0	0%	3	2%	3	2%
融合として存在しない[14]	2	8%	11	8%	13	8%

表 3　『日本語アクセント史総合資料-研究編』における 2/3 拍のアクセント

	2/3 （V・A）		2/3 （V・A 以外）		2+3 全般	
合計	37[15]		85		122	
無核	1	3%	10	12%	11	9%
無核（LLLLL を含む）	2	5%	11	13%	13	11%
-2 安定型	29	78%	60	71%	89	73%
明らかに非融合	0	0%	1	1%	1	1%
融合として存在しない	3	8%	7	8%	10	8%

10) 24 項目のうち，23 項目は後部が「V」のものであり，1 項目のみ後部が「A」のものである。
11) HHHHH と LLLLH。
12) HHHHL，LHHHL，LLHHL，LLLHL。
13) HHLHH，LHLHL，LHLLH。
14) 京阪系アクセント（中央式）では，融合アクセントとして存在することはないアクセント。LHHHH，LLHHH，LLLHH，LLLLF がある。表 3 も同様である。
15) 37 項目のうち，24 項目は後部が「V」のものである。

「3 拍+2 拍」（表 2）と「2 拍+3 拍」（表 3）における，「V・A」と「V・A 以外」で，「無核（LLLLL を含む）」の語数と「-2 型」の語数の分布の均一性について正確確率検定（両側）を用いて検定した結果，表 2（3 拍+2 拍）の場合は有意差が認められ(p< 0.001)，表 3（2 拍+3 拍）の場合は有意差が認められなかった(p = 0.334)。つまり，3 拍+2 拍の複合名詞の場合，「V・A」であるか「V・A 以外」であるかで，アクセントの優勢型が異なるということになる。

木部(1978)は「名詞＋居体言」の語構成を持つ 4 拍名詞は，「複合語アクセントに非常に特色があ」り，「複合語アクセントが全平調傾向を示す」としている。一方，同じ(3)名詞＋居体言　の語構成を持つ 5 拍名詞については,「事情は少し変わってくる」とし，「マイナス二拍め契機のものが多い」という。

4 拍名詞における全平調と 5 拍名詞におけるマイナス二拍め契機の型は「安定型アクセント」であり，それぞれの音節数名詞で所属する語彙数が最も多い型であるという。「所属する語彙数の多い型は，何らかの意味で発音しやすく，安定的な発音をもったものだったろうと推測されるので，安定型アクセントと呼ぶことにする」としている。こうした 5 拍名詞においてマイナス二拍め契機の型が「安定型アクセント」であるという点は，桜井(1958)の院政・平安時代の 5 拍語の「基本アクセント」は最後から二番目の音節に下がり目がくる型であるという主張と一致している。

ただし，木部(1978)の言う「(3)名詞＋居体言」タイプの 5 拍名詞には，「トリアワセ（闘鳥）＝**上上上上**平（法下 83・2）」のような 2/3 拍のものと，「カレヒツケ（鞍鞘）＝平平平平平（僧中 73・5）」のような 3/2 拍のものが混在している。

『日本語アクセント史総合資料-研究編』で調べた結果，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）（ほぼ木部(1978)のいう「(3)名詞＋居体言」に相当する）の 5 拍複合名詞に関しては，　2+3 拍のもので最も優勢なアクセントは確かに-2 型であるが，前後が 3+2 拍の場合，最も優勢なアクセントは無核（LLLLL を含む）である。

前後が 3+2 拍の 5 拍で，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）のものでは「無核（LLLLL を含む）が優勢であるという傾向は，木部(1978)における 4 拍の「(3)名詞＋居体言」のものが「全平調になりやすい」傾向と似ているようである。なお，木部(1978)の言う（4 拍の）「全平調」には「**上上上上**」と「平平平平」の 2 種類があり，木部(1978)で示されている 4 拍の「(3)名詞＋居体言」ものはすべて 2+2 拍である。

今回の調査結果と木部(1978)の主張を併せて考えると，院政期の複合名詞アクセントにおいては，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）の場合，後部要素が 2 拍のものは，LLLLL(LLLL)，LLLLH(LLLH)，HHHHH(HHHH)のいずれかをとることが多く，後部要素が 3 拍のものは，−2 型の中高型になることが多いことが示唆された。

このように，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）であるかどうかという語構造の違いは，後部要素が 2 拍のもののアクセント型を左右する要因の 1 つであると言えそうである。ただし，後部要素が 3 拍のものに関してはこの要因の影響を受

けないようである。具体的には，後部が 2 拍のもので，後部が V･A の場合，無核（LLLLL を含む）になることが多く，それ以外の場合は-2 になることが多い。一方，後部が 3 拍のものでは，後部が V・A であるか否かによらず，-2 になることが多い。

3.2.2　現代のアクセントとの比較

「『非融合アクセント』の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かった」という 2 章で得られた仮説を検証するために，同一項目の歴史的アクセント（『日本語アクセント史総合資料-研究編』）と，現代のアクセント・現代の京都アクセント（『日本国語大辞典　第二版』における当該項目の（現代の）「標準アクセント」と「現代京都アクセント」）を比べる。

東京方言の「複合語アクセント規則」（本研究でいう「融合アクセント」）について，上野(1997)によれば，下がり目の位置がどこにくるかは，後部要素 Y の長さにより異なり，「後部要素決定型」が基本であるという。Y が 3 拍以上の場合，Y が語中核（中高型）の時のみ，複合語 Z は元の X の核位置を保つ[16]。その他の場合は Y の 1 拍目に核がくる[17]。

上野(1997)は，後部要素 Y が 2 拍以下の場合，Y が 3 拍以上のときと違って，Y のアクセント型だけから複合名詞のアクセント Z を予測することはできず，Y の単語（形態素）ごとの情報が必要になる，としている。

また，『新明解アクセント辞典』の習得法則 13 は「後部が動詞･形容詞などでできた結合名詞（前･後部とも二拍以下のものを除く）」の場合，後部が動詞[18]で，二拍以下のものについては，「前部が後部に修飾的，副詞的にかかるものは，原則として平板型になる。連濁する」（例：フ｢クロトジニスル　（袋綴じ））。一方，「後部が前部を目的格とする他動詞は，原則として前部の最後の拍まで高い。連濁しない」（例：タ｢マゴ｣トジオ　ツ｢ク｣ル　（卵綴じ））。また，後部が三拍以上のものについては，「原則として後部の第一拍まで高い。多く連濁する」（例：オ｢ヤオ｣モイ　ノコ　（親思い））。

院政期と現代の 3/2 拍と 2/3 拍の複合名詞の優勢型について，上野 (1997)と『新明解アクセント辞典』の習得法則 13，そして，今回 3.2.1 で調べた結果を表 4 にまとめてみた。

---

16) ただし，新世代では，Y が中高型のときでも，事実上複合語のアクセントにおいて Y の 1 拍目に核がくる（上野 1997）。

17) X が関わるのは，前部要素 X と後部要素 Y が共に短い Y≦2＆ X≦2 の時と，X が数詞の時，ぐらいである（上野 1997）。

18) 同法則によると，形容詞の語幹がつくものについては，「原則として平板型」（例：テ｢ミジカニイク　（手短））になるという。

表 4　院政期と現代の 3/2 拍と 2/3 拍複合名詞の優勢型

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">院政期</td><td colspan="4">現在（東京）</td></tr>
<tr><td></td><td>後部が V・A</td><td>後部が V・A 以外</td><td colspan="2">後部が V</td><td>後部が V・A 以外</td><td>後部が A</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3/2 拍</td><td rowspan="2">無核型</td><td rowspan="2">-2 型</td><td>項関係</td><td>項関係ではない</td><td rowspan="2">?</td><td rowspan="4">平板型</td></tr>
<tr><td>-3 型</td><td>平板型</td></tr>
<tr><td>2/3 拍</td><td>-2 型</td><td>-2 型</td><td colspan="3">-3 型</td></tr>
</table>

表 4 から分かるように，「2/3 拍」については，院政期と現在（東京）では核位置こそ違うが，後部が V[19]であるか否かによらず中高型が優勢である。一方，「3/2 拍」については，後部が V の場合，院政期は無核（LLLLL を含む）が優勢だった[20]が，現在では-3 型が優勢であることから，無核から中高型（-3 型）への変化が起こったと推測される。無論，「2/3 拍」においても，院政期には中高型(-2 型)ではない型だったものが，現在は中高型(-3)へ変化したことも十分あり得るため，「3/2 拍」と「2/3 拍」の複合名詞の現代のアクセントを調べることで，中高型へ変化した例を探してみる。

具体的には，3.2.1 で調査した語のうち，『日本語アクセント史総合資料-研究編』において a.無核（LLLLL を含む），または b.明らかに融合アクセントではないようなアクセント型（LHHHH，LLHHH，LLLHH のような 2 箇所が高い型），c.「京阪系アクセント（中央式）では，融合アクセントとして存在しないアクセント」のいずれかで，『日本国語大辞典　第二版』において（現代の）「標準アクセント」と「現代京都アクセント」のいずれかが中高型（-3 型）[21]を含むものの数を表 5 に示す。つまり，歴史的アクセントは中高型（-2 型）ではない型であり，現代のアクセントにおいて中高型（-3）型がある項目の数である。

ただ，取りあえず HHHHH，LLLLL のようないわゆる「全平調」と LLLLH を「無核」として扱っているが，これらは「非融合アクセント」と言えるのか，それとも，「平板型融合」と呼んだほうがふさわしいのかという問題は今後さらに考える必要がある。

19) 後部が A のものに関しては，『日本語アクセント史総合資料-研究編』を調べて得られた項目の中に，後部が A のものは 1 項目しかないため，今回はその変化を見ることができていない。
20) 『日本語アクセント史総合資料-研究編』から得られた，後部が V・A の 3+2 複合名詞 24 項目のうち，前部と後部が項関係ではない「つつみやき（包焼）」(LLHHH)と「ももよがき（百夜書）」(LLHHL)の 2 項目と，そして前後が項関係ではあるが後部要素が形容動詞語幹の「ひたひびろ（額広）」(HHHHL)の 1 項目以外は，すべて後部が動詞由来で前後が項関係のものである。そのため，3.2.1 で述べている「後部が V・A の 3+2 複合名詞」を「後部が V で，前後が項関係の 3+2 複合名詞」と言い換えることができそうである。すなわち，「後部が V で，前後が項関係の 3+2 複合名詞」の院政期の優勢なアクセントは無核型（LLLLL を含む）である。
21) 前部 3 拍後部 2 拍の場合，前後要素の境界に，前部 2 拍後部 3 拍の場合，後部要素の 1 拍目にアクセント核が来る。

表５　タイプ別の中高型（-3）への変化
（-2 から-3 のような，核の位置のみが変わるものは含まない）（/は記載なし）

	変化数	現代アが分かる項目数[総項目数]	変化割合	語例　総合資料のア～日本国語大辞典の標準ア。京ア
3/2(V･A)	5	11〔24〕	45%	いしなどり　石取　HHHHH ～ 3。テ 3
3/2(V･A 以外)	24	76〔129〕	32%	ひとつまつ　一松　LLLLH ～ 3。/
3/2 全般	29	87〔153〕	33%	
2/3(V･A)	1	22〔37〕	5%	かたたがへ　方違　LLLLL ～ 3。/
2/3(V･A 以外)	11	60〔85〕	18%	はるかすみ　春霞　LLHHH ～ 3。コ 3
2/3 全般	12	82〔122〕	15%	

表 5 から，3/2(V・A)，3/2(V・A 以外)，2/3(V・A)，2/3(V・A 以外)，の 4 つのタイプはいずれも，-3 への変化が見られることが分かった。このように，a.無核（LLLLL を含む），または b. 明らかに融合アクセントではないようなアクセント型（LHHHH，LLHHH，LLLHH といった 2 箇所が高い型），c.「京阪系アクセント（中央式）では，融合アクセントとして存在しないアクセント」，
つまり，「非融合アクセント」（無核を含む）の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かった可能性を確認できたと言えよう。

3/2 全般のほうが，2/3 全般より，中高型(-3)への変化の割合が多い理由として，既に古い時代から 2/3 は中高型が優勢なタイプであったためではないかと考えられる。

4　まとめ

本稿では院政期以前の複合名詞アクセントについて検討した。桜井(1958)の記述をアクセントの融合・非融合の立場から整理すると，後部要素が 3 拍の 2 要素からなる複合名詞のアクセントについては，平安・院政時代の京都方言に「融合アクセント」と「非融合アクセント」の 2 種類の形態があり，そして「非融合アクセント」をとるものより，「融合アクセント」をとるものが多かった。また，5 拍語の場合，「融合アクセント」をとるとき，前部要素の式（低起・高起）が複合名詞の式を決定し，核の位置は常に最後から 2 拍目にあった。式保存の点においては現在の近畿アクセントと一致しているが，核の位置という点において現在の近畿アクセント及び東京アクセントとは異なる。そのうえで，「非融合アクセント」の適用範囲が現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かった可能性を主張した。

さらに，その可能性を確認するために，『日本語アクセント史総合資料-研究編』（秋永ら 1998）と『日本国語大辞典　第二版』（北原 2003）を調べた結果，以下のことが分かった。

院政期の複合名詞について，後部要素が「動詞出自」「形容詞出自」（V・A）であるかどうかという語構造の違いが，後部要素が 2 拍のもののアクセント型を左右する要因の 1 つであると言える。ただし，後部要素が 3 拍のものに関してはこの要因の影響を受けないようである。具体的には，後部が 2 拍のものは，後部が V・A のときは無核（LLLLL を含む）になることが多く，それ以外の場合は-2 になることが多い。一方，後部が 3 拍のものは，後部が V・A であるか否かによらず，-2 になることが多い。

また，同一複合名詞の院政期アクセントと現在のアクセントを比べると，3/2(V・A)，3/2(V・A 以外)，2/3(V・A)，2/3(V・A 以外)，の 4 つのタイプのいずれにおいても，中高型（-3）への変化が見られることから，「非融合アクセント」（無核を含む）の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広かった可能性を確認できた。

今後の課題として，『日本語アクセント史総合資料-研究編』における 5 拍名詞，の前部要素と後部要素の単独のアクセントを調べる必要がある。そして，院政期の HHHHH，LLLLL，LLLLH を「無核」として扱っているが，これらは「非融合アクセント」なのか，それとも，「平板型融合」と呼んだほうがふさわしいのかという問題をさらに考える必要がある。

参考文献

秋永一枝 (1996) 「東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退」『国文学研究』118,86-96.

秋永一枝・坂本清・鈴木豊・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊 (1998) 『日本語アクセント史総合資料-研究編』東京堂出版.

秋永一枝（編）(2010) 『新明解日本語アクセント辞典　CD 付き』三省堂.

上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」『日本語音声 2　アクセント・イントネーション・リズム・ポーズ』231-270, 三省堂.

北原保雄 (2003) 『日本国語大辞典　第二版』.

木部暢子 (1978) 「形態アクセント論的一考察−複合語アクセントと語構成・連濁をめぐって−」『語文研究』(46)41–49, 九州大学国語国文学会.

桜井茂治 (1958) 「平安・院政時代における複合名詞のアクセント法則−五音節語を資料として−」『国語学』(33) 56–79, 日本語学会.

松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古 (2012) 『日本語アクセント入門』三省堂.

和田實 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71, 10–13.